

花田勝広 『北部九州の軍事遺跡と本土決戦―沖ノ島砲台と宗像』

(宗像考古刊行会、二〇一六年、非売品、四七一頁)

横山 尊

本書は、題目が示すように、沖ノ島砲台や宗像を中心として、北部九州の軍事遺跡と本土決戦のあり方を、膨大な史料を引用しつつ明らかにすることを試みた浩瀚な内容の書籍である。著者の花田勝広氏は宗像市出身で、滋賀県野洲市教育委員会文化財保護課に勤務しつつ、宗像地域の考古学研究を中心に、多くの著述を著してこられた。昨今は『出光佐三と宗像―温故知新と回想』(宗像考古刊行会、二〇一六年)を著わすなど、近現代の動向にも造詣の深い方である。

まえがきで著者は研究の現状について、従来の調査は「銃後の生活」を中心に記述されたため、戦争の作戦が解明されず、戦争遺跡の具体的な位置の検討がされないことを「一番の問題点」に挙げる。本研究の目的を著者はこう説明する。「防衛研究所戦史センター史料をもとに、太平洋戦争の実態を現地に残る遺跡を通じて、史料と遺跡を通じ、解明することが目的であり、戦争体験者から併せて聞き取りを実施するものである。そして、できるだけ多くの戦史遺跡の記録化を進め、平和学習の基礎資料とするものであり、負の歴史の調査法の確立を目指すものである」。さらに、研究の方法として太平洋戦争、近代史を「考古学の手法」で解明することと説明し、「戦史の基本情報である戦史遺跡地図」を公表し、遺跡保存、平和学習に役立てたいとしている。

以下、本書の本論は、筆者の故郷である宗像地域を中心に、福岡沿岸一帯の防空施設の配置、作戦、戦争遺跡の関係資料を、後世の回想録などを踏まえつつ紹介している。

第一章は沖ノ島砲台の調査についてである。朝鮮系海峡要塞では壱岐、対馬を中心に軍艦攻撃用の三〇ないしは四〇加農砲を設置していたが、対潜水艦対策のため、一五糎加農砲を新たに、沖ノ島、小呂島、筑前大島などに設置することになった。沖ノ島では起工が一九三七年六月、竣工が四〇年三月であった。一節は、前提となる作戦、建設作業、施設を、考古学的調査に基づいた絵図を踏まえながら詳細に紹介している。二節は、沖ノ島第七中隊の回想録を踏まえ、四三年一〇月に沖ノ島付近で沈没した崑崙丸や四五年の終戦前の砲台守備隊の苦難などを伝えている。

第二章は筑前大島砲台の調査である。大島砲台は一九三五年五月に着工し、三六年一二月に竣工した。前章と同じく一節は軍事施設の概要、建設作業の経緯、軍事施設の概要、大島砲台にも置かれた四五式一五糎加農砲の史料紹介をし、大島に見られる「要塞第一区地帯標」は要塞地帯法、軍機保護法を踏まえ説明する。二節は聞き取り調査に加え、四五年五月の火砲の移管指示に基づく火砲の移動を紹介している。

第三章は白島砲台の調査である。響灘の白島砲台は一九三六年七月に着工し、三七年一〇月に竣工した。同章は、砲台の建設工事、四一年七月以降の要塞準備の下令の史料紹介、白島砲台と北九州空襲に関する回想録の引用から成っている。

第四章は宗像周辺への軍の配置についてである。一節は宗像地域の勤労動員を扱う。陸軍芦屋飛行場は一九三九年一〇月に起工し、四二年五月に開廠式を行った。国防訓練場（津屋崎飛行場）は四四年一二月に開場した。大阪陸軍航空補給廠福岡出張所は、四三〇四四年に弾薬庫が建設され、福岡駅から引き込み線も敷設された。それら建設作業のために、学徒動員の宗像高等女学校、宗像中学などの労働力が投じられた。本節は施設の概況や関係資料、回想録が紹介されている。二節は四一年の独ソ戦勃発以降の防空連隊の配置を扱う。西部防空旅団の防空三五連隊は遠賀郡、宗像郡に置かれ、聴測中隊・分隊が配置され、四四年六月の八幡空襲後に防空部隊が高射砲集団と名を変え、高射砲一三五連隊の本部は海老津に駐屯し、高射砲集団司令部は芦屋にあった。高射砲一三五連隊は四四年一二月に解隊され、独立照空二一大隊に編成され、その中心は春日村に移った。本節はその関係資料や部隊配置図を紹介する。また、四四年夏には下関防備隊津屋崎防備衛所が設置された。本節は四五年八月の兵器雷雷品船艇施設の一覧、下関防備隊戦時日誌に基づいた四三年一〇月から四五年八月までの大型船舶被害の一覧も掲載する。二節はその終わりに、北九州高射砲隊全体の活動概況一覧、防空配置図を示している。

第五章の宗像の本土決戦には最も多い頁数を費やしている。一節は北九州沿岸における作戦計画を扱う。一九四五年二月に二六方面が発足

し、四月はその軍隷属化で、北部九州を担任する五六軍が発足した。その傘下で、若松、折尾、海老津、赤間、東郷、福岡で教育訓練、築城作業に専念したのが第一四五師団だった。また、遠賀郡岡垣地域には歩兵四一八連隊が配備され、連隊本部は海老津にあった。本節はそれらの作戦計画の史料や編成、軍事兵器の概要を紹介する。二節は福津地域の軍の配備を扱う。四五年七月上旬は三五一師団が古賀、新宮に配備され、五七師団は福岡市、粕屋郡、糸島を中心に作戦を進め、一四五師団は宗像に後退した。本節はこの三五一師団の作戦計画、兵力配置などの史料を紹介している。三五一師団などを隷属化に置いた第五六軍は、四五年八月頃、敵上陸の初動を制すべく「福岡会戦指導方策」を策定した。加えて本節は三五一師団の隷属下にあった歩兵三三八連隊（津屋崎）、三二九連隊（新宮）、三三〇連隊（古賀）の配置、敗戦後の一四五師団、三五一師団の兵器、弾薬庫の処理の詳細も紹介する。三節は「宗像郡のまとめ」と称し、日露戦争にまでさかのぼる。輸送船・常陸丸が一九〇四年六月にウラジオ艦隊に撃沈され、その際、生存者約九〇名が沖ノ島で救助されるも、多くの遺体が同島の岸边に漂着したこと、沖ノ島砲台と崑崙丸沈没も踏まえ、戦時中の「負の歴史」を説明する必要性を改めて強調している。

第六章は福岡平地の本土決戦を扱う。一節は第五七師団戦争資料に基づいた記述である。一九四五年四月から香椎、早良郡の海岸部、粕屋郡、那珂郡、筑紫郡を中心に配備されたのは、満州から転用された第五七師団であった。本節はその進駐、作戦準備、福岡会戦ないしは福岡平地会戦を想定した戦闘指導要領、部隊配置、師団の装備、陣地の連携に関する資料を紹介している。二節は、防空大隊・高射砲連隊の配備について

である。特に、本節は、一九四五年三月に編成され、春日、七隈、大野城、和白に配置された独立防空照空第二大隊、四五年五月に一六方面軍司令官の直接指揮下に入った北九州高射砲連隊（博多地区防空隊）などの配備、戦後処理の状況などが記載されている。

第七章は糸島の本土決戦についてで、第三二師団大東亜戦争資料に基づいた記述である。第三二師団は一九四五年五月、久留米で編成された師団で、糸島半島に配備された。その配置、編成や前原地区の歩兵第三五九連隊の概要、そして敗戦に伴う戦後処理の史料紹介がなされている。

第八章は言岐要塞小呂島砲台の調査についてである。一節は、『志岐要塞重砲兵連隊史・対馬要塞重砲兵連隊史』に基づき、要塞の兵備、編成、作戦の紹介、小呂島砲台の軍事施設、海軍施設の紹介を仔細にしている。また、砲台の設置状況も回想録などを踏まえて記している。二節は、回想録に基づき、一九四五年六月、八月の小呂島への空襲、一九四五年五月に小呂島付近で空襲に遭い大破した大楠丸のことを記している。三節は、小呂島砲台と海軍防備衛所について軍事施設の性格と役割、軍事活動についての資料紹介をしている。

終章は総括に替え、①沖ノ島砲台と宗像について、戦争の実態から目をそむけ「神の島」の幻想が引きずる問題点、②宗像における銃後の記録の史料一覧、③「陸軍省大日記」の三分の一、「公文備考」の七分の一がアメリカに残存している可能性を記す。

このように本書は、宗像を中心とした北部九州の防海・防空の軍事施設、作戦について詳細かつ網羅的に記述した浩漣な内容である。ただし、そうであるが故に生じる疑問点や難点もあるように見える。

第一に叙述の力点がどこにあるのかという問題である。本書は宗像のみならず、白島、福岡市、糸島、小呂島まで北部九州の沿岸一帯を幅広く叙述の焦点に収める。しかし、宗像のウェイトは非常に多い。そうすると、叙述の焦点は、北部九州の防空、防海と軍事施設のあり方なのか、宗像の戦時なのか不分明である。なぜ宗像の記述が突出して多いのかは、単純に著者が宗像出身であること以上のレベルで、本来は説明されるべきであろう。叙述の力点を見えにくいものになっているのは、叙述の多くが長文の資料紹介、史料引用から成り、章や節の議論の方向性が読者にとってつかみにくいことも要因だと思われる。

第二に議論と叙述の方法についてである。本書の研究の方法は、太平洋戦争、近代史を「考古学的手法」で解明することだという。しかし、本書はそう主張する割には、文献史料による記述、しかも資料集と見まがうほどの長文の引用が大部分を占めている。加えて、考古学に関する記載も、著者本人によるものよりも、他の研究者の調査を参照した部分のほうが多い。さらに、考古学的研究を自称するなら、その調査の方法論や遺跡・発掘物の詳細を文章でも説明する必要があると思うが、大部分は文献史料や回想録の長文の引用で替えられている。それ故に、まえがきに記された「負の歴史の調査法の確立」もどのように成されたのか不分明と言わざるを得ない。確かに本書は考古学の成果が多く盛り込まれているが、どこまで「考古学的」著作なのかは考慮の余地があるように思われる。

第三は、研究の現状の把握についてである。戦争の作戦が解明されず、戦争遺跡の具体的な位置の検討がなされなかったことは大変な問題点だが、どこまで、従来の調査が「銃後の生活」を中心に記述したこと

に責めを負わせてよいものか。そもそも「従来の調査」が何を指すのかわからない、宗像に至っては「銃後の生活」の研究すら不十分な状況に留まっているように思われる。

本書はかかる問題点はあるものの、総論としては、多くの新知見を与える、非常に有益な研究であることは間違いない。何より、戦争遺跡の実態、位置が、戦史遺跡地図のかたちで、広域に解明されたことは特大筆書すべきことである。著者が主張するように、戦争遺跡の保存、教育への活用の糸口となることは確実であろう。文献史料にしても、かつての『宗像市史』の記述からは考えられないほどの豊富な史料情報を加えることに成功している。さらに、銃後の生活の記述や戦後の回想録にしても、軍の作戦行動と照合させた把握は不可欠だという著者の指摘は正鵠を得たものであり、『新修宗像市史』にもその方針は反映されねばならない。

加えて、二〇一七年七月における『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群」のユネスコ世界文化遺産登録決定を踏まえれば、終章の「沖ノ島砲台と神島」にある指摘は深刻に受け止め共有されるべきである。既に一九三七年の陸軍の砲台設置で沖ノ島は俗世界にまみれ、戦争中、死者が出て、海鳥が食され、五四年に離島振興法に基づく第四種漁港としての工事が行われた際、工事飯場の女性が一八日間居座る事件も起き、考古資料の盗難も起きたという。諸種の禁制はすでに破られているため、禁制をやめても宗像大社の価値が下がらないとする著者の主張は、議論の余地があるかもしれない。しかし、沖ノ島を「神の島」として幻想を引きずったことは、実は太平洋戦争の理解不足と表裏一体であるとの指摘は非常に示唆に富む。

繰り返しになるが本書はかつての『宗像市史』などと比較すれば、それを大きく振り切る多大な情報量を加えたことは間違いない。『新修宗像市史』でも極めて重要な位置を占める参考文献の一つになる。非売品で入手困難であるとは言え、より多くの人々に認知されるべき書籍であるため、ここに紹介した次第である。

(よこやまたかし 近代部会)